

# フィロロジと共同研究

高田時雄

## 1 はじめに：フィロロジの研究

筆者はいわゆる文学研究者ではないので、特集のテーマ「文学研究の現在と展望」にどれほど相應しい話題を提供できるかは、はなはだ心許ない。ただ、文学研究といっても、その文学の指す範囲は相當に廣いものであってよいはずだと、勝手に解釈をして話を進めることにしたい。そう自己本意に理解すると、文学研究なるものも、要するに古いテキストを読み解く営みであって、それに附隨して問題となるさまざまな事象の研究を包含したものということになる。書かれた言語自身の分析からはじめて、制度、思想、宗教、民族、地理など、その及ぶ範囲は、テキストそのものの性格によって區々であるが、中心に讀書があるという点では一致している筈である。西洋においてフィロロジという名で發展してきた學問體系は、ややこれに近いと考えられる。一方、フィロロジの譯語としてわが國で往々用いられる文獻學という語は、なんとなく補助學としてのおもむきが濃厚で、今ひとつしっくりしない感がある。もちろん西洋のフィロロジも必ずしも一義的な内容をもったことばではない。中國ではその譯語に日本と同じ文獻學を用いることもあるが、語文學、語史學などとも譯しているのは、フィロロジそのものの指す内容によって捉え方に違いが生じているのである。ともあれ、そういった古いテキスト（最近は近代のテキストも対象になる場合があるようだ）の讀解を中心とする研究分野が嚴然として存在していることは事實であり、それを西洋のことばを借りてフィロロジと呼んでおきたいと思う。古くは讀書そのものが學問であり得た時代があった。その頃には他と區別して自らを名の必要もなかったわけだが、今日こと新しく名前を付けるとなれば、かえって名稱に困ることになる。それでフィロロジなどという渡來もの名を借りてこないといけないようなことになるわけだ。中國では清朝に隆盛を誇った考證學とか考据學とかいうものが、色々な面でフィロロジに似通ったところがある。我田引水でこの用語を用いたいところだが、中國という地域を離れて採用するにはやはり少し躊躇われる。

## 2 會讀について

さて筆者の勤務する京都大學人文科學研究所では、共同研究を活動の中心に据えている。現在でこそ全國共同利用研をはじめ、日本中の多くの研究機関で共同研究と稱するものが行われるようになったが、そもそもは人文研の研究班に由来する、とされている。ただ共同研究といっても幾つかの種類があり、その中に「會讀」を中心にしたものがある。これは主に東方部の研究班で行われているもので、いわば共同でフィロロジーを行うものだと言ってもよい。世間でいう共同研究とはかなりスタイルの異なったものである。毎週乃至は各週に集まって一緒に本を読むというこの方式は、今日では交通が便利になったとはいえ、遠隔地からの参加は、なかなか難しいものがある。いきおい参加者は近邊に限られてくる。そのためもあってこの方式はいわゆる共同研究の方式としては世間に広がっていないようだ。

人文研の東方部は、さかのぼると戦前の東方文化研究所という政府助成金による研究機関に行き着く。この研究所で行われていたのは、「中國ヲ中心トスル東方文化關連事項」の研究だが、すでにその時代から會讀を内容とする共同研究が存在していた。昭和十四年の『東方文化研究所要覽』を繙くと、「經學文學研究室員主トナリテ毎週一回清段玉裁撰スル所ノ古文尚書撰異ヲ會讀シ既ニ梓材マデ終レリ」とか「歴史研究員ノ主催ニテ毎週一回清顧炎武撰日知録ノ會讀ヲ行ヒツツアリ」といった記録が見えている。會讀というのは、要するに複数の人間が集まって皆で同じ本を読むことで、學生諸君が自主的に行う讀書會と特に変わりはない。ともあれ現在の人文研における共同研究の一方の柱になっている會讀方式の研究班は、古い傳統を持つものだと言ってよく、東方部の現行研究班は少なくとも過半がこの方式に従っているのである。

ところで「會讀」という名稱である。會合を持って讀書するところから會讀と名づけられたのに違いないが、漢語としては些かおかしなことばで、事實中國にはこんな表現はない。どうしてこんな名稱のもとにこんなスタイルの研究が行われるようになったのかは氣になるところである。中國では學問といえ、一人で苦心してあれこれ考え抜くというスタイルが一般的である。グループで相談しあってというようなことはない。昔からずっとそうだったかは簡単には言えないが、清朝考證學のイメージはだいたいそんなところであろう。段玉裁がその『六書音韻表』の定稿を作るのに、「ある年の冬、(北京の)法源寺の側の蓮華庵にこもって、戸に鍵を下ろし、石炭を焚いて」研究に専念したというのは典型的な例である。これは執筆の場合であるが、讀書についても同様であるに違いない。

ところがわが國では江戸の昔からどうも會讀が行われていたらしい。手近にあるやや大きな辭典を見ると、「書を讀むに、我獨り讀むがよきか、人と共に讀みて、世にいふ會讀するがよきやと問人あり」という用例が挙げられているが、その出典は江村北海の『授業編』(天明三、一七八三年刊)である。

さらに徳富蘆花の『思出の記』の「曾て萬國新史の會讀の時」という例も挙げられており、明治の世にも會讀が盛んであったことがわかる。とすれば會讀という方式が東方文化研究所における草創でないことは確かである。しかしまたわが國では古くから讀書の一形式として行われてきたものだという事も分かる。日本人にとっては讀書とは畢竟外國の書物を読むことであって、外國の書を読み解くには、獨りでやるよりも衆知を集めるのが効果的だという経験から、次第に會讀のスタイルができあがったものであろう。それが人文研では一個の確立した研究方式にまで發展したのだといえる。

いずれにせよ國際的に見ると、この方式はかなり特異なものらしく、外國の研究者からは一種驚きの目で見られることがままある。研究班そのものの運営はともかく、報告書も會讀の成果がそのままに反映されているとなると、非常に不思議な感じがするらしいのである。筆者も参加した具體例として『慧超往五天竺國傳研究』（班長：桑山正進）の場合を挙げよう。八世紀の二〇年代、慧超という新羅出身の僧が求法のために船でインドにわたり、歸路は中央アジア經由で中國に歸ってきた。その旅行記の寫本が偶然今世紀の初頭に敦煌から發見されている。きわめて貴重な發見であったために、これまでも多くの學者が同寫本を取り上げてきた。上記研究班ではその寫本を改めて研究対象に選んだことになるが、會讀という仕方ではおそらく初めての試みであったと思われる。班員のメンバーは考古學、佛教學、歴史學、言語學、美術史、科學史といった分野の研究者であった。會讀での議論は、専門による問題意識が異なるために、時として途方もないところに飛び火することもあったが、思いがけない知見が得られることもしばしばであった。陳腐な表現を用いれば學際的研究ということになる。寫本の譯注としてすでに同名の報告書が出版されているが（一九九二年）、會讀の成果をつぶさに反映したその注釋は、個人による研究では容易に企圖し得ない廣がりや専門性を備えることとなった。刊行後まもなく中國で複数の書評が出現したが、すべて共同研究という方法の優位に言及しているのは印象的である。思えば會讀方式の共同研究はフィロロジーの日本的展開と言っても過言ではない。その傳統は今後も生産的に受け継いでいくべきであらう。

### 3 索引と漢字のデジタル化

さて文獻を読み解くための基礎的な工具として索引の編纂は不可欠である。人文研ではその前身の東方文化研究所時代から、數多くの索引を作成してきた。かつては古文獻の索引作成を行うための索引編纂室が設けられていたほどである。また索引の作成が上に述べた會讀と密接な連携を保っている点にも注意を喚起しておく必要がある。會讀の過程で嚴密な校訂テキストが作られ、また一方で、會讀の参考に資するために索引が作られる、といった関係になっているわけだ。人文研における最近の事例を挙げれば、『眞誥』研究班

(班長：吉川忠夫)の副産物として『眞誥索引』( 麥谷邦夫編)が作られ、西域行記の研究班から『西域行記録索引叢刊』( 桑山正進・高田時雄編)が刊行されつつあることを指摘し得る。

ところでこれらの索引は漢字文獻に特徴的ないわゆる一字索引である。一字索引というのはテキストに出現するすべての文字を前後の数字とともに一覧できるようにした、一種のコンコーダンスである。コンピュータが出現する前は索引の作成をまったくの手仕事で行っていた。一枚ずつカードを採って、それを並べ換え、さらに清書するという、氣の遠くなるような作業を行っていたわけである。一字索引ともなれば、テキストの全文字数だけの枚数のカードが必要になる勘定である。本文十萬字の書物なら、同数のカードが必要であった。それを並べ換えるとなると、それはまた相當の時間が必要になった。さらにカードでは使用に制限があるために、印刷して複数の研究者の利用に供するとなると、相應の経費もかかり決して安易な事業ではなかったのである。

ところが今日では、コンピュータのおかげで、一字索引の作成はほぼ一瞬にして出来るようになったし、配布するにも印刷された冊子の形體を取る必要はなくなってきている。フロッピーにせよCDにせよ何らかの記憶媒体を用いればきわめて簡便にやり取りが出来るようになった。さらには一々フロッピーで手渡したりするまでもなく、必要なその時々ネット上で検索すれば済むというところまで進歩しつつある。条件は唯一デジタル化されたテキストが用意されていることである。しかし、漢字文獻の場合にはこのデジタル化という点でなかなか問題が多いのである。索引の作成のような単純作業はコンピュータのもっとも得意な分野であることは、衆目の一致するところだが、いかんせん今日のコンピュータは使用できる漢字に制限がある。その上に、漢字を用いている國々のあいだでコード體系が異なっているから、国内用のコードを使用している限り、ネット上での漢字情報の圓滑な交換は不可能である。近年、ユニコードをベースにした國際規格(20902字)が出来たが、それをサポートする環境はまだ充分ではないし、それが利用可能になったとしても學術用に必要な漢字数は満たされない。たとえば『康熙字典』で4万9千餘、わが國の『大漢和辭典』が5万強の字数を収録していることを考えればよい。こういった基本字書すらデジタル化出来ないのが現状である。さらに古刊本や古寫本には字書未収の漢字が非常に多いのである。したがって漢字文獻の研究を現代にふさわしい仕方で發展させるには、まず學術情報交換用漢字に関わる基盤整備が不可欠である。それが解決されなければ、わが國のフィロロジは現代的な學問として生き残ることは難しい。せっかくの共同研究も援軍を得られないのである。

## 4 おわりに：フィロロジの将来

現在、大英図書館のスタッフを中心にしてウェブ上で国際敦煌學プロジェクト（The International Dunhuang Project）が稼働している。そのホームページにはインタラクティブ・データベース（The IDP Interactive Web Database）というものが置かれている。敦煌寫本の畫像を検索することができ、さらに各寫本に関する研究情報を、世界の敦煌學研究者が書き込むことで、まさにインタラクティブな研究を進めることが出来るようになっている。現在のところ、上に述べた漢字周りの問題が存在するために、デジタル化されたテキストを添えるまでには至っていないが、この試みは将来における敦煌文獻の國際的共同研究の可能性を示してくれる。敦煌文獻を表現するのに十分な漢字が供給されて、皆がある種の規格に従っておれを利用するなら、ウェブ上で敦煌寫本の「會讀」をやるというのもまんざら夢ではない。もちろんこれは敦煌寫本にかぎらず、漢字文獻をあつかうフィロロジカルなすべての分野に通じて言えることであり、その意味でも早急な學術用電子漢字の整備が望まれるのである。